４　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。　〈鹿児島大〉二〇一九年度出題

　成田空港に降り立ち、素っ気ない空間を入国審査所に向かって歩きはじめる時、きまって感じることがある。空間は面白みがなく無機質だが、なんと素晴らしく掃除の行き届いた場所だろうかと。床のタイルはどこもピカピカで、床の上で転げ回ってもさして服は汚れないのではないかと思うほど。カーペットを敷きつめた床も清潔だ。仮にシミがあっても、それを除去しようと最善の努力をはらった①コンセキがある。おそらく掃除をする人は、仕事の終了時間が来ても、モップや掃除機をさっさと片付けたりしないで、切りのいいところまで仕事をやりおおせて帰るに違いない。この丁寧さが、他国から帰ってくると切実に感じられる。空港を出てクルマで高速道路を走りはじめてもこの感覚は持続する。田園風景を切り裂いて進む景観に高揚感はないが、路面は鏡のように滑らかで、クルマのエンジン音もきわめて静かだ。道路に沿って点灯する街路灯も、どれひとつとして消えていたりはしない。

　その感慨はやがて都心部の夜景に吸い込まれていく。東京に近づくにつれ、夜景の緻密さに感覚が引き締まってくるようだ。ひとつひとつのどのりも、しっかりと確かに点灯しており、切れたり明滅したりはしていない。確実に揺るぎなくっている。そんな灯りが集合して高層ビルとなり、果てしない奥行きの中に連なってしい光の②タイセキをなす。

　今の東京の夜景は、世界で一番美しいかもしれない。そういう感想を漏らすと、異論を唱える人は少なからずいる。夜景はやっぱりムンバイですよとか、のヴィクトリアピークから見下ろす夜景にはかなわないなどと、うるさ方の意見は百出するけれども、同意してくれる人は案外と少ない。やはり、思い過ごしかもしれないと思いはじめていた矢先、都市をテーマとしたテレビのドキュメンタリー番組で、世界の空を飛び回るパイロットたちの言葉が紹介されていた。

　「いま、上空から眺めて一番きれいな夜景は東京」

　世界の夜景を機上から眺め続けている人々の意見だけに説得力がある。まさに我が意を得た思いがした。世界広しといえども、東京ほど広大な広がりを持つ都市はないし、信頼感あるひとつひとつの灯りがそういう規模で結集しているわけである。このあたりに僕はひとつの確信を持つ。

　掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、灯りを管理する人も、すべて丁寧に篤実に仕事をしている。あえて言葉にするなら「繊細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

　これはＡ海外では簡単に手に入らない価値観である。パリでも、ミラノでも、ロンドンでも、たとえば展覧会の会場ひとつ日本並みの完成度で作ろうとするなら、その骨折りは並大抵ではない。基本的に何かをよりよく丁寧にやろうという意識が希薄である。労働者は時間がくれば作業をやめる。効率や品質を向上させようという意欲よりもマイペースを貫く個の尊厳が仕事に優先するとでも言うか。それを前提に、管理する側がほどよく制御して仕事を進めていく。確かに、ヨーロッパには職人気質というものが存在するが、日常の掃除や、展示会場の設営などは、職人気質の及ぶ範囲ではないのかもしれない。さらに言えば、こうした普通の環境を丁寧にしつらえる意識は作業をしている当人たちの問題のみならず、その環境を共有する一般の人々の意識のレベルにもがっているような気がする。特別な職人の領域だけにな意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体でに共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。

　Ｂものづくりに必要な資源とはまさにこの「美意識」ではないかと僕は最近思いはじめている。これは決して比喩やたとえではない。ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性があってこそ、ものはその文化の中で育まれ成長する。まさに美意識こそものづくりを継続していくための③フダンの資源である。しかし一般的にはそう思われていない。資源といえば、まずは物質的な天然資源のことを指す。

　日本は天然資源に恵まれないので、工業製品を生み出すために高度な「技術」を磨いてきたと言われる。戦後の高度経済成長は、そのような構図でものづくりを進めてきた成果である。世界はそう認識しているし、日本人もそう思ってきた。戦後の日本が得意とした工業生産は「規格大量生産」、つまり均一にたくさん製品を作ることをきわめて安定した水準で達成することであった。また、製品を小型化する凝縮力のようなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功した。日本の生産技術は、量を前提とした品質と、緻密さや凝縮性を工業製品として体現した結果、世界からの高い信用を獲得したのだ。

　しかしながら、ここで言う「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔にものづくりを遂行することであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。つまり、今日において空港の床が清潔に磨きあげられていたり、都市の夜景をなす灯りのひとつひとつが確実に光を放つことの背景にある同じ感受性が、規格大量生産においても働いていたのではないかと考えられる。高度な生産技術やハイテクノロジーを走らせる技術の、まさに先端を作る資源が美意識であるという根拠はここにある。

　日本は石油や鉄鉱石のような天然資源に乏しい。これは事実で、この事実が歴史の重要な局面でこの国の方針に大きく影響し、第二次大戦に日本が歩みを進めてしまった要因のひとつもここにある。しかし、今日においては、天然資源の確保にとしてきたことがむしろプラスに転じはじめている。もしも日本に石油が豊富に湧き出ていたら、おそらくは環境や省エネルギーに対する意識は今日ほどには高まってはいなかったはずだ。周囲を海に囲まれ、その大半が山であるという恵まれた自然も、湧き出る石油や排ガスによって後戻りできないほどにぼろぼろに汚染されていたかもしれないし、地球温暖化をもたらす温室効果ガスの排出量規制について、京都で国際会議を主宰する主体性も持ち得ていなかっただろう。むしろ、日本の石油消費や二酸化炭素の排出を抑制すべく、中国やアメリカが必死で説得するような事態を迎えていたかもしれない。マネーという富はもっと巨大にこの国に蓄えられ、医療も、教育も、通信も、全て無料で国が提供するような裕福な国になっていたかもしれないが、その豊かさは、やがて訪れる次の時代に対応できず、悲惨な衰退を運命づけられていたかもしれない。

　Ｃ幸いなことに、日本には天然資源がない。そしてこの国を繁栄させてきた資源は別のところにある。それは繊細、丁寧、緻密、簡潔にものや環境をしつらえる知恵であり感性である。天然資源は今日、その流動性が④ホショウされている世界においては買うことができる。オーストラリアのアルミニウムも、ロシアの石油も、お金を払えば買えるのだ。しかし文化の根底で育まれてきた感覚資源はお金で買うことはできない。求められても輸出できない価値なのである。

　冷静に見ると、日本の工業製品は、つつましさやエネルギー消費の視点、そして使用者の成熟にともなう製品の洗練という点で、すでに優位性を発揮しはじめている。世界同時不況のせいですこし見えにくくなってはいるが、日本の自動車メーカーがひととき世界一の販売台数を記録したのもその一端である。生活者の意識も、省エネルギーや環境に対する負荷の軽さを前向きに受けとめるようになり、暮らしの、目に見えない中心に、⑤カジョウを避け、節度をわきまえていく志向や理性をひそやかに宿らせているのである。

　今日、僕たちは、自らの文化が世界に貢献できる点を、感覚資源からあらためて見つめ直してみてはどうだろうか。そうすることで、これから世界が必要とするはずの、つつましさや合理性をバランスよく表現できる国としての自意識をたずさえて、未来に向かうことができる。

　生産技術は現在、アジア全域、そして世界全域に等しく広がっていく時代を迎えている。自国におけるものづくりの空洞化を憂いている暇はない。ものの生産においては、量よりも質へと、はっきりと重心をシフトしていくことを考えなくてはならない。さらには、工業生産と同時に、恵まれた自然環境にも目を向け、サービスやホスピタリティの局面にも資源としての美意識を振り向けていくことが重要である。そうすることで、自然をハイテクノロジーと感性の両面から運用できる、新しいタイプの環境立国として日本はその存在を示していくことができると思うのだ。石油は産しないが、温泉はいたるところに湧き出ている。住まいやオフィスの環境も、モビリティや通信文化の洗練も、医療や福祉の細やかさも、ホテルやリゾートの快適さも、美意識を資源とすることで、僕らは経済文化の新しいステージに立つことができるはずだ。

　技術も生活も芸術も、その成長点の先端には、微細に打ち震えながらＤ世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能している。そこに目をこらすのだ。世界は美意識で競い合ってこそ豊かになる。

（『日本のデザイン　美意識がつくる未来』による。ただし、原文を一部改めた。）

問１　傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

問２　傍線部Ａ「海外では簡単に手に入らない価値観」とはどのような価値観か。ヨーロッパとの対照を明確にしつつ、九〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「ものづくりに必要な資源とはまさにこの『美意識』ではないか」と筆者が考えるのはなぜか。「技術」という語を用いて、八〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部Ｃ「幸いなことに、日本には天然資源がない」とあるが、天然資源がないことによって、日本がどのような事態を免れ得たと筆者は考えているか。八〇字以内で説明せよ。

◎問５　傍線部Ｄ「世界や未来を繊細に感知していく感受性」について、日本のこうした「感受性」がこれからの世界では必要だと筆者が考える理由を、本文の論旨に沿って、一五〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝痕跡　　②＝堆積　　③＝不断　　④＝保障　　⑤＝過剰

問２　Ａ特別な領域以外では仕事の質よりも個の尊厳を重視するヨーロッパの価値観とは違って、Ｂ日常のどんな仕事においても当然のこととして Ｃ繊細・丁寧・緻密・簡潔を目指す日本の価値観。（83字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４〔「特別な領域以外」という内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「常識として社会に共有される」という内容があれば可。〕

Ｃ＝３

問３　Ａ繊細・丁寧・緻密・簡潔にものづくりを遂行するという技術は、Ｂものの作り手と受け手に共有される感受性たる美意識があることによってこそ磨かれていくから。（73字）

Ａがなければ全体０。

Ａ＝５〔「技術」の定義を説明していれば可。〕

Ｂ＝５〔「美意識」が「技術」を磨いていくという内容があれば可。〕

問４　Ａ天然資源の豊かさゆえに、環境や省エネルギー問題に対する意識が低く、Ｂ自然環境を汚染し、Ｃ国際社会からも批難され、Ｄ次の時代に対応できなくなって、衰退するような事態。（79字）

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔「天然資源の豊かさゆえに」の内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝２

Ｄ＝３〔「衰退していく」という内容のみは不可。〕

問５　Ａ生産技術が世界に広がる現在、環境汚染への懸念や生活者の成熟により、量より質が求められる世の中になる。そこでＢ繊細さや丁寧さを貴ぶ日本の美意識は、つつましさや合理性をバランスよく表現し、Ｃハイテクノロジーと感性の両面から自然を運用して新たな経済文化を生み出すことで、Ｄ世界を豊かにすることができるから。（147字）

Ａ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３〔「生産技術が世界に広がる」という内容がなければ減点１。〕

Ｂ＝２〔「日本の美意識は、つつましさや合理性をバランスよく表現できる」という内容があれば可。〕

Ｃ＝３〔「新たな経済文化を生み出す」という内容がなければ減点１。〕

Ｄ＝２